

トマス・アクィナスにおける「分析の道」 (via resolutionis)の意味

江口克彦

序

本小論の目的は、トマスにおける形而上学の方法の一つとしての「分析の道」(via resolutionis)に注目し、その意味を明らかにすることにある¹⁾。トマスによれば、形而上学とは、最も可知的なもの(maxime intelligibilia)を考察する学知、すなわち、有である限りにおける有(ens in quantum est ens)を主題として考察し、かかる主題の始原(principium)である限りにおいて、神ならびに離存実体(substantia separata)といった神的有(ens divinum)をも考察する学知である²⁾。そして『ボエティウス三位一体論註解』(*Expositio super librum Boethii De trinitate*)においては、この学知の対象が「存在に関して質料に依存しないところのもの」(ea quae non dependeant a materia secundum esse)であることが、分離(separatio)という否定判断との関係において論じられている³⁾。すなわち、分離によって、この学知の主題である有である限りにおける有について、それが必ずしも質料のうちに存するのではないということが理解される、というのである⁴⁾。しかし、本小論において、形而上学の方法として、分離ではなくあえて分析(resolutio)に着目したのは次のような理由による。まず、トマスによれば、形而上学は有(ens)を非質料的なものである限りにおいて考察する学知ではない⁵⁾。それ故、質料的、非質料的を問わず、およそ有である限りにおいて有を把握する過程として、「分析の道」に注目したいのである。さらに、分離という否定判断が可能となるためには、少なくとも一つの非質料的な有の存在することがあらかじめ認識されていなければならないであろうが、しかし、非質料的有の認識は、トマスによれば、あくまで形而上学の探求の目的(finis)として位置づけられねばならない⁶⁾。しかるに、以下において検討するように、有である限りにおける有の始原(principium)としての非質料的な有の把握もまた、「分析の道」の

到達目標 (terminus) である、というのがトマスの所説なのである。ところで、トマスは、我々人間の認識が感覚から始まることを様々な箇所で語っているが、『ポエティウス三位一体論註解』においても、人間の認識は可感的なもの (sensibilia) から可知的なもの (intelligibilia) へと進むべきことを確認している。このような可感的なものから出発する人間の認識過程、すなわち「理性の探求」(inquisitio rationis) について、トマスは次のように述べている。「理性の探求がそこへと到達すべき究極の到達目標は諸原理 (principia) の知解であり、それらの諸原理への分析を行うことによって、我々は判断を下すのである (ultimus terminus, ad quem rationis inquisitio percedere debet, est intellectus principiorum, in quae resolvendo iudicamus)」⁷⁾。我々がここで注目したいのは、トマスが、始原・原理の把捉へといたる過程を、とくに「分析する」(resolvere) と表現している点なのである。

I 「分析の道」の二つの方向

トマスによれば、「分析の道」の向かう方向には二つある。一つは、内的な原因に即して (secundum causas intrinsecas) 進む分析であり、もう一つは、外的な原因・結果にそって (per causas vel effectus extrinsecos) 進む分析である。そこでまず、以下この二つの分析を順を追って見てゆくことにしよう。

内的な原因に即して進む分析について、トマスは次のように述べている。

「ある場合には、理性は概念に即して (secundum rationem) 一つのものから別のもう一つのものへと進んでゆく。内的な原因に即して進む場合がそれである。この場合、複合する (componere) ことによって、最高に普遍的な形相からより特殊な形相へと進み、分析する (resolvere) ことによって、これとは逆になる。なぜなら、より普遍的なものはより単純だからである。しかるに、最高に普遍的なものは、すべての有に共通的なものである。したがって、この道 (via) における分析の究極の到達目標は、有ならびに有である限りにおける有に属するところのものの考察なのである」⁸⁾。

我々人間の認識の出発点である可感的なものは、有以外の何ものでない。しかし、感覚されたものとしての有は、この有 (hoc ens) あるいはしかじかの有 (tale ens) として把捉されているにすぎず、まだ有である限りにおける有としては把捉されてはいない。有を有である限りにおいて把捉すること、それが内的な原因に即して進む分

析の到達目標なのである⁹⁾。しかし、ここで言われている内的な原因とは、可感的実体の構成要素、すなわち、形相・質料ではない。可感的実体のみならず、およそ有であるものすべてに共通的なもの (communia) ——有、および一と多、現実態と可能態といった有である限りにおける有に属するところのもの¹⁰⁾——を把捉することが、内的な原因に即しての分析なのである。このような分析について、トマスは『真理論』冒頭の周知の箇所においては、次のように述べている。「知性がいわば最もよく知られるものして第一に懐抱するところのもの、そして、すべての概念をそれへと分析するところのもの、それは有である」¹¹⁾。すなわち、内的な原因に即しての分析によって把捉されるのは、第一の可知的なもの (primum intelligibile) としての有なのである¹²⁾。

これに対し、外的な原因・結果にそって進む分析については、トマスは次のように述べている。「ある場合には、理性は事物に即して (secundum rem) 一つのものから別のもう一つのものへと進んでゆく。外的な原因・結果にそって論証がなされる場合がそれである。すなわち、そのような論証は、複合することによっては、原因から結果へと進み、分析することによっては、結果から原因へと進むのである。なぜなら、原因は結果よりもいっそう単純で不変的、一様に永遠的だからである。したがって、この道における分析の究極の到達目標は、離存実体という最高に単純な卓越した原因に到達することである¹³⁾」。それでは、この最高に単純な卓越した原因とはいかなるものであろうか。トマスは、附帯性と実体、可減の実体と非可減の実体といった諸々の有には、段階 (gradus) と秩序 (ordo) が存することを指摘する。そして、そのような有の段階・秩序の最高位に、最高有 (maxime ens) なるものを据えるのである。すなわち、「すべての有の存在の始原 (principium essendi) であるところのものは、『形而上学』第二巻に述べられているように、最高有でなければならない」のである¹⁴⁾。我々はここで、トマスが、存在の始原が最高有であることの傍証として、アリストテレスの『形而上学』第二巻を援用していることに注意を向けたい。トマスの援用する『形而上学』第二巻の一節は、『神学大全』のいわゆる「第四の道」においても「典拠」として援用されているからである¹⁵⁾。トマスの「第四の道」は、諸事物に見出される完全性の段階 (gradus) を上昇し、それらの完全性の原因としての神が存在することを導き出す論証として知られている。——真・善・高貴などの完全性には、より多く・より少なくといった段階が見出される。しかるに、このより多く・より少

なくといった段階の差異は、最高の段階にあるものへの接近の度合いに応じて語られている。したがって、最高に真・最高に善・最高に高貴であるところのものが存在しているのだからなければならない。ところで、最高に真なるものは、最高の有でもある。それゆえ、すべての有にとって、その存在と善性、その他すべての完全性の原因であるものが存在しなくてはならず、これを我々は神と呼ぶ。——これが「第四の道」の概略であった¹⁶⁾。つまり、最高有とは、すべての有にとってのあらゆる完全性の原因であり、それゆえ、存在性の段階 (gradus entitatis) において一切の有を超越 (transcendere) する有なのである¹⁷⁾。

しかし、「理性的なるもの」である限りにおいて、人間の認識の出発点はあくまで感覚である。それゆえ、我々人間は、存在の始原である最高有のみならず、いかなる非質料の実体についても、通常の仕方では認識を持つことはできない。それでは、我々は、存在の始原である最高有をいかなる仕方によって把握し、また、いかなる仕方によって語るができるのであろうか。トマスは、我々人間による非質料の実体の認識について次のように述べている。「非質料の実体の場合、我々はその類を認識する代わりに、否定を重ねることによって (per negationes) 認識する。たとえば、我々はこの種の実体について、この種の実体は非質料的であり、非物体的であり、形やその他このたぐいのものを持つのではない、ということを知るのである。そして我々が、非質料の実体についての、より多くの否定を認識すればするほど、我々のうちにある、そのような非質料の実体についての認識は、より少なく不分明なものとなる」¹⁸⁾。さらに、トマスは次のようにも述べている。我々人間は非質料の実体について、「それが何であるか (quid est) の認識の代わりに、否定による (per negationem) 認識や、因果性による (per causalitatem) 認識、あるいは、超出による (per excessum) 認識をもつのである」¹⁹⁾。つまり、トマスのいう、存在の始原を到達目標とする、外的な原因・結果に沿って進められる分析とは、ディオニシオス・アレオパギテースによって示された三つの道、すなわち、原因性の道 (via causalitatis)、卓越性の道 (via eminentiae)、除去の道 (via remotionis) が一つになったものだ、とも考えることができるのである。それゆえ、存在の始原である最高有とは、被造的な有ではないという意味では、非有 (non ens) であり、また、被造的な有を超えるという意味では、超有 (supra ens) なのである²⁰⁾。

Ⅱ 存在の始原の探求

さて、「分析の道」とは、我々にとってより多く知られる可感的なものから、自然本性的により多く知られる可知的なものへと進んでゆく認識の過程であった。ところで、トマスは、その著作のいくつかにおいて、事物の原因・存在の始原の探求の歴史を語っているが、それはまた、可感的なものから可知的なものへと進んでゆく認識の歩みでもある。そこで、「分析の道」の意義を明らかにするため、『離存実体論』(*De substantiis separatis*)における叙述を手がかりに、存在の始原の探求の歴史を振り返っておきたい。トマスによれば、人々は、はじめ、事物の始原を外的かつ附帯的な変化に求め、質料をもって事物の第一の始原であると見なした。しかし、「より後の哲学者たちはさらに前進し、可感的実体を質料および形相という本質を構成する部分へと分析した。そして、質料が代わる代わる様々な形相の基体となるかぎりにおいて、ある種の変転において自然的事物が生成する、と主張したのである」²¹⁾。だが、この可感的実体の形相・質料への分析の段階においても、いまだ質料的事物にのみ適合する因果性が捉えられているにすぎない。ところが、一部の人はさらに進んで、存在そのものに関わる因果性を把握し、有である限りにおいて有を考察するに到った。彼らは、「変化や運動によって (*per mutationem vel motum*) 何らかのものが生成するといった生成の様式を超えて、いかなる変化にも運動にもよるのではなく、むしろ、存在が流入することによる (*per influentiam essendi*) ある種の生成の様式、ないしは事物の起源の様式が存しなければならない」²²⁾ ということを理解し、そして、有の普遍的原因 (*causa universalis*) を存在の始原として捉えるに到ったのである²³⁾。有の原因を存在の始原として把握することは、有を、原因された有 (*ens causatum*)、分有による有 (*ens per participationem*) として捉えることでもある。「第一の始原は必然的に最高に単純なものであるから、存在を分有する (*esse participans*) という仕方によって存在するのではなく、むしろ、存在そのものが現存する (*ipsum esse existens*) という仕方によって存在する、ということは必然である。しかるに、自存する存在はただ一つしか存在しえないのであるから、自存する存在のもとに存在するそれ以外のすべてのものは、存在を分有するという仕方では存在するものでなければならない」からである²⁴⁾。そして、有を分有による有として捉えることによって、有の内的原因に関しての分析もまた、形相・質料を超え、より共通的、より普遍的な観点か

ら遂行されることになる。すなわち、分有による有のすべてにおいて、「ある共通的な分析 (communis resolutio) がなされなければならない。共通的な分析とは、知性によって、分有による有の各々が存在するところのもの (id quod est) とその存在 (esse) へと分析される、そのような分析である」⁵⁾。

さて、以上の、トマスによる、存在の始原の探求の歴史は、我々一人一人の認識の深まりの過程に対応するとは考えられないだろうか。可感的実体のみを対象とする段階において、始原の認識は、形相・質料の地平にとどまっている。しかし、有の普遍的原因である存在の始原の把捉を到達目標とする外的な原因・結果に沿っての分析は、形相・質料を超えて遂行される。先に見たように、外的な原因・結果に沿っての分析の究極の到達目標である存在の始原・最高有は、存在性の段階においてすべての有を超越するものとして理解されていた。この存在性の段階においてすべての有を超越するものは、トマスによれば、最も完全なもの (completissimum) であり、最高度に現実態において存在 (esse maxime actu) するものである²⁰⁾。すなわち、端的な存在 (esse) の領域にも現実態と可能態が適用され、現実態は存在の現実態 (actus essendi) として理解されるにいたるのである。そして、存在の領域にも現実態と可能態が適用されることによって、有である限りにおける有の把捉へと向かう内的な原因に即しての分析もまた可能となる。換言すれば、外的な原因・結果に沿っての分析によって、より共通的、より普遍的なものとして捉え直されるに到達した現実態・可能態の図式において、質料的な有のみならず、非質料的な有についても、それを「有である限りにおいて」把捉することが可能となるのである。

結 語

以上見てきたように、トマスによれば、我々人間には、分析によって存在の始原の把捉へといたる道が開かれている。もちろん、存在の始原の把捉といっても、それはあくまで「分析の道」の到達目標であり、人間はこの存在の始原を完全な仕方では認識できるわけではない。外的な原因・結果に沿っての分析の到達目標である、最高有に冠せられた「最高」(maxime) には、可感的・質料的な領域を「超越する」という意味が込められていたからである。しかし、それにもかかわらず、たとえどれほど不完全な仕方であっても、あらゆる有の共通かつ普遍的な原因は存在の始原である、と認識することは、形相・質料を超え、有である限りにおける有の認識を可能にするもの

であった。様々な有は、存在性の段階をそれぞれ異にするものとして、改めて捉え直されることになるのである。つまり、トマスにおいて、「分析の道」とは有を有である限りにおいて把捉する観点を形成する過程であったのだ、と解することができるのである。そしてまた、トマスにおいては、神的な学知、すなわち、有である限りにおける有を主題として考察し、神的有を始原である限りにおいて考察する学知は、この分析という方法ゆえに、「形而上学」(metaphysica)なのである。なぜなら、このような学知は「分析することによって (resolvendo)、自然学の後に来るのであるから、いわば自然学を超える学知という意味で、形而上学と呼ばれる」²⁷⁾からである。

注

- 1) トマスにおける「分析」(resolutio)をめぐる問題については以下の文献を参照。L.-M. Régis, *Analyse et synthèse dans l'œuvre de saint Thomas*, in *Studia Mediaevalia in honorem admodum reverendi patris Raymundi Josephi Martin*, 1948, pp. 303-330; S. E. Dolan, *Resolution and Composition in Speculative and Practical Discourse*, in: *Laval théologique et philosophique*, Vol. VI, 1950, pp. 9-62; J. Isaac, *La notion de dialectique chez saint Thomas*, in: *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, Tome XXXIV, 1950, pp. 481-506; L. Oeing-Hanhoff, *Die Methoden der Metaphysik in Mittelalter*, in: *Miscellanea mediaevalia*, Band 2, 1963, pp. 71-91; J. C. Doig, *Aquinas on Metaphysics: A historico-doctrinal study of the Commentary on the Metaphysics*, 1972, pp. 64-77; J. F. Wippel, "First Philosophy" according to Thomas Aquinas, in his *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas*, 1984, pp. 55-66; J. A. Aertsen, *Nature and Creature: Thomas Aquinas's Way of Thought*, 1988, pp. 252-278; ders., *Method and Metaphysics: The via resolutionis in Aquinas*, in: *The New Scholasticism*, Vol. LXIII, 1989, pp. 405-418; ders., *Was heißt Metaphysik bei Thomas von Aquin?*, in: *Miscellanea mediaevalia*, Band 22/1, 1994, pp. 217-239.
- 2) *In BDH.*, q. 5, a. 1, c.; q. 5, a. 4, c. cf. *In Metaph.*, prooemium.
- 3) *In BDH.*, q. 5, a. 3, c.
- 4) 「分離」(separatio)については例えば以下の文献を参照。L.-B. Geiger, *Abstraction et séparation d'après Saint Thomas*, in *De Trinitate*, q. 5, a. 3, in: *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, Tome XXXI, 1947, pp. 3-40; S. Neumann, *Gegenstand und Methode der theoretischen Wissenschaften nach Thomas von Aquin aufgrund der Expositio super librum Boethii De*

- trinitate*, 1965. pp. 75-97, 145-51; J. F. Wippel, *Metaphysics and Separatio* in Thomas Aquinas, in his *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas*, 1984, pp. 69-104; 渡部菊郎, 「抽象と分離——トマスにおける形而上学の可能根拠の一考察——」, 『中世哲学研究: VERITAS』, 第10号, 1991年, pp. 40-50.
- 5) *In BDH.*, q. 5, a. 4, ad 5.
 - 6) *In BDH.*, q. 6, a. 1, ad 3 q., c. cf. *In Metaph.*, proœmium.
 - 7) *In BDH.*, q. 6, a. 1, ad 1 q., c.
 - 8) *In BDH.*, q. 6, a. 1, ad 3 q., c.
 - 9) *Ibid.* cf. *In Metaph.*, proœmium.
 - 10) *In BDH.*, q. 5, a. 1, c.; q. 5, a. 4, c. cf. *In Metaph.*, proœmium.
 - 11) *De verit.*, q. 1, a. 1, c.
 - 12) Cf. *S. T.*, I, q. 5, a. 2, c.
 - 13) *In BDH.*, q. 6, a. 1, ad 3 q., c.
 - 14) *In BDH.*, q. 5, a. 4, c.
 - 15) トマスの『形而上学』第二巻理解については以下の文献を参照. V. de Coues-nongles, *La causalité du maximum. L'utilisation par Saint Thomas d'un passage d'Aristote*, in: *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, Tome XXXVIII, 1954, pp. 433-444; derse., *La causalité du maximum. Pourquoi Saint Thomas a-t-il mal cité Aristote?*, in: *Revue des sciences philosophiques et théologiques*, Tome XXXVIII, 1954, pp. 658-680; ders., *Mesure et causalité dans la quarta via*, in: *Revue thomiste*, Tome LVIII, 1958, pp. 55-75; 日下昭夫, *Dualité de la causa efficient: selon l'Aristote qu'expose saint Thomas d'Aquin*, 『人文学』, 第129号, 1971年, pp. 1-24.
 - 16) *S. T.*, I, q. 2, a. 3, c.
 - 17) Cf. *In II Metaph.*, lect. 2, 292-295.
 - 18) *In BDH.*, q. 6, a. 3, c.
 - 19) *Ibid.*
 - 20) Cf. *De div. nom.*, VII, 3, PG. III, 869D-873A.
 - 21) *De subst. sep.* c. 9.
 - 22) *Ibid.*
 - 23) *S. T.*, I, q. 44, a. 2, c.
 - 24) *De subst. sep.* c. 9.
 - 25) *Ibid.*
 - 26) *In BDH.*, q. 5, a. 4, c.
 - 27) *In BDH.*, q. 6, a. 1, ad 3 q., c. cf. *In Metaph.*, proœmium.

(付記) 『ボエティウス三位一体論註解』(*In BDT.* と略記) はデッカー版を、『離存実体論』(*De subst. sep.* と略記) はレオ批判版を用いた。また、*In BDT.* については松田禎二氏の訳業を、*De subst. sep.* については八木雄二氏、矢玉俊彦氏の訳業を参考とした。